

「ひきこもり」の生きづらさと生き方

——共有されない経験と物語——

関西学院大学／日本学術振興会 伊藤康貴

目的：本稿では「ひきこもり」の生きづらさを論じる。まず「ひきこもり」当事者は「社会への再適応」の名目で「仕事」や「結婚」という社会的自立に駆り立てられていることを明確にしたうえで、当事者の自己物語は、社会に再適応するというマスターナラティブ的な「回復の物語」(Frank 1995)とオルナティブな生き方を選択するという「探求の物語」との間で葛藤する側面を考察する。次いで現代社会の人間関係を語る上では欠かせないにもかかわらず「ひきこもり支援」の文脈では「個人的」という理由で捨象されてきた「セクシュアルな語り」(伊藤 2011)に照準しつつ、その自己物語自体も社会的に承認されえないままに当事者は自らの身体を社会に曝け出さざるを得ない状況を問う。

方法：引きこもった経験を持つ者が記述した自分史(筆者分含む)と筆者が参与している自助グループ等の観察データ、インタビューデータに基づきながら、筆者の引きこもった経験を再考しつつ質的な分析を進める。

議論：「ひきこもり」は、不登校と差異化されつつ(高山 2008; 工藤 2008)、当事者は実存的疑問に直面しているとされる(石川 2007)。一方で「ひきこもり」においては、いかに社会へ再適応するかという観点から心理学的な「発達論」(斎藤環)や「就労」(玄田有史)の側面ばかり語られてきた。例えば斎藤環の「ひきこもり」の定義(斎藤 1998; 斎藤 2002)では、「発達論」に依拠しつつ社会参加(=回復)のイメージを「就学・就労」と「家族以外に親密な対人関係を持つ」と定式化している。当事者自身も同様な形式で社会参加のイメージを「仕事」と「結婚」とし、結果的にある種の「回復の物語」が構築されている(塩倉 2000; 上山 2001)。

「ひきこもり」経験の語りは、自身の経験を「回復の物語」に同一化させたり、あるいは「回復の物語」への挫折や抵抗という形式で表現されている。一方で「回復の物語」への挫折や抵抗を示しつつ「オルタナティブな生き方」を提示する当事者もあり、かれらは我々に別様の「社会参加の仕方」を提示している。このように「仕事」と「結婚」は「ひきこもり」を語るうえでの欠かせない要素なのである。ただ「仕事」や「結婚」していても「ひきこもりの自助グループ」に通い続ける人はありふれており、この事実は我々の社会における「社会参加」の複雑さを示している。しかし「ひきこもり」概念は、男性を「仕事=家庭の外」、女性を「結婚=家庭の内」に振り分けて語らせる装置としても働いており、結果的に「主婦だけでも引きこもっている」といったような女性の「ひきこもり」を不可視化させているのも事実である。

このように男女を切り分ける装置に加え、「ひきこもり」の当事者の「セクシュアルな語り」をもとにした「回復の物語」には「ミソジニー」(Sedgwick 1985; 上野 2010)という観点が入り込んでいる。すなわち女性の語りは引きこもったことを自らの身体性に向かわせている(自己嫌悪)のに対し、男性は引きこもったことを社会性・経済性に向かわせつつ結果的に「女は社会性や経済性に付いてくる」という観点を成立させているということである。

結論：このような複数の物語のダイナミズムのなかで、「ひきこもり」の自助グループなどの場において「ひきこもり」独特の生きづらさが個別に語られているわけである。ただしその物語は「回復の物語」であったとしても「探求の物語」であったとしても、皆がそのように生きられるわけではないという点において必ずしも参加者に共有されたものではない。むしろそれは「ひきこもり」概念や「ひきこもり支援」が「仕事」と「結婚」を問題化していたとしても、実際の当事者における問題状況はまた別のところ(セクシュアリティ観など)にあることを示している。